

このところ進学校では年々医学部志望者が増えている。それにともない各校は「医学部受験対策」に力を入れている。そこで今回は、海城の「医学部小論文・面接講座」を見学させてもらった。海城のそれは、驚くほど広範な知識・情報と医療への思いとが凝縮された時間だった。

安田教育研究所  
代表  
**安田理氏**

### 年間計画の中で 位置づけられた講座内容

今回私が見学したのは、夏期講習の講座だったが、この講座も年間計画の枠組みの中でキチンと位置づけられたもので、今年で10年目となる。

高2の3学期に「医師志望動機の見直し」、高3の1学期に「医師・患者関係論」、夏期講習で「地域医療論」、2学期に「先端医療論」、2学期の終わりから「模擬面接」という全体構成の中の一環として行われているものであった。

夏期講習のこの講座は、80分×2コマ×5日間。最初の2日間が地方における地域医療の実情を学び、3日目に小論文を書き、4日目に都市部の地域医療も考察し、5日目に国語科教師の小論文指導と合評という構成。私が見学したのは2日目である。

### リアリティーのある材料を 大量に提供

2コマ・160分間だけでも、大量のプリントが配られた。

30歳代の女性医師一人で担う「へき地診療所」、それを支える「へき地拠点病院」、それらの厳しい現実を伝える新聞記事、モンスター患者への対応のために警官OBを置いた病院の話、過疎の村で10年も過ごした異色の医師のインタビュー記事、佐久総合病院と「長野モデル」についての話……。

無味乾燥な教科書的な知識・情報ではない。どれもが今の医療現場の状況、そこで働く生身の医師の姿を伝えるものばかり。



その上、「へき地拠点病院」で実名が挙がった病院については、たまたま近くで柔道部が合宿していて、けがをした生徒をその病院に担ぎ込んだという顧問の先生が登壇。「長野モデル」の話のときには信州大学・大学院に6年いたという先生が登壇して、「長野県は日本一公民館の数が多いんだよ。それが予防医療の普及に役立ったんだ」といった話をする。佐久総合病院では、実際に病院を取材調査に訪れたときに先生が目にした売店で医師と患者が普通に立ち話をする光景を語る。

このように1人が担当するのではなく、5人の先生が担当（社会科2人、国語科2人、理科「生物」1

# 医師になる覚悟と問題意識を育てる講座

人。1コマの展開の中でどの先生がどこで何を話すか、事前に入念に準備されている。

「楽しい」という表現は語弊があるかもしれないが、バラエティー番組のようになあつという間の160分だった。

### うかがえる先生たちの「思い」

医療のような多面的な性格を持つテーマを扱うときには、何を材料として選ぶのか、どのような話をするかで、講座内容は全く異なったものになる。

「地域医療論」というテーマから、大学の話は自治医科大学、国立大学医学部の「地域枠」について語られる。

そこから現在の大きな課題、

○医師の地域的偏在  
○医師の診療科的偏在へと発展。

医師個人について触れられたことも大きな特徴であった。佐久総合病院での若月俊一医師の病氣予防のための草の根の活動、長らく農村で暮らす人々に寄り添った色平哲郎医師、そうした人の人生にまで踏み込む。

一緒に授業を受けていると、先生たちは具体的な言葉としては発しないが、単に難関であるから目指すのではなく、医療従事者として人の役に立つ覚悟をそれとなく求めている。また、注目されやすい「先端医療」にばかり目を向けるのではなく、人間と深く向き合っている「総合医」の存在も強調しているように感じる。

「医学部小論文・面接講座」という名称であったが、見学前にイメージしていた、各大学で出題された文章を基に解答・解説するような授業では全くなく、ものすごくベーシックな医療、医師そのものについて考察する授業であった。

「医学部に合格させる講座」ではなく、「医師を育てる講座」であることが、いかにも海城らしいと言える。

